

## 目次

ページ

2017年度 第2回幹事会報告	1
時代を語り建築を語る会(第17回)、平成29年度 特別講演会(共催)	2
被爆建物見学と広島都市形成の新視点討論会	3
時代を語り建築を語る会(第18回)	5
H29年度 支部地域活動助成事業報告四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会	6
今後の活動計画	8
編集後記	8

## 2017年度 第2回幹事会報告

### 1. 日時

2017(平成29)年5月20日(土) 15:30~16:50

### 2. 場所

復建調査設計㈱ 会議室

### 3. 出席者数

出席者数20名中19名(委任状提出者含む)

### 4. 会議の概要及び議決の結果

#### ■議題1 特別企画について

○ 藤原支部長から、支部特別企画事業のたたき台として、別添の「HATS50年～モビリティ科学の理論と実践～(たたき台)」の内容と次の事項について説明された。

・2017年は、1967(S42)年に初めて広島で実施したパーソントリップ調査後50周年となることを記念して、当時関与した方々を広島に集めることを企画したらとの学会本部からの意見があったことが提案の背景にある。

・学会本部から、必要な費用の大半は、学会本部で負担できると提案されている。

・広島都市圏交通計画視察は、広島市へ依頼する予定である。

・祝辞を頂く松井広島市長については、市(都市計画課)で日程を調整している。

○ たたき台に対する意見等として

・開催日は、平日とする

・主催は、土木学会土木計画学研究委員会ではなく土木学会とし建設コンサルタンツ協会中国支部も追加する

・シンポジウムの開会挨拶は、大石土木学会長だけでなく横張都市計画学会会長の両名で。

・ビデオクリップは、予算との関係もあるが、昔の都市の写真や背景の紹介なども含めた内容とし、他の場でも活用できるものになりたい。

・パネルディスカッションの進行、パネリストの候補者

は、今後調整する。

・『都市交通計画とPT調査』、『広島都市圏交通計画の検証』のプレゼンテーションは、パネルディスカッションの前に実施するほうが、流れがスムーズである。

・『ワークショップ』は、時間的に厳しそうであり、他の内容とのレベル感にもギャップがあるなどのため割愛する。

・新聞、テレビなどマスコミも活用する。

○ 以上の意見等を踏まえつつ、本特別企画を開催することについては、幹事会として承認する。

○ 今後、藤原支部長が本部と密接に連携し、事務局を通じて情報提供(共有)や意見聴取等をする。

#### ■その他

○ 各支部が運営管理するHPサーバーは、セキュリティ面での対策や情報の一体化などに対応するため、本部のHPに一本化する方向で進んでいる(本部理事会での決定事項)。

○ 国際化に対応し、留学生会員が帰国後も継続して学会活動に参加できる仕組みづくりが必要である(アジア圏でのシンポジウム開催など)。

○ 支部会員数は県毎に差異があるが、会員の少ない県にあっても、学会の認知度を高めていかなければならない。

○ 2020年の全国大会は中国四国支部が担当となるため、2019年に準備会を立上げる必要がある。

○ 支部からの功績賞表彰推薦候補は早期に探索すべきであり、過去の経緯等々も踏まえ、高井先生や近藤先生を候補者として考える。以上

(文責：長谷山 弘志)

## ■ 時代を語り建築を語る会 (第 17 回)、 平成 29 年度 特別講演会 (共催) ■■■■■■

日時：平成 29 年 6 月 2 日 (金) 18:30~20:30

場所：合人社ウエンディひと・まちプラザ  
(北棟 5 階 研修室 B)

講演：基町再開発をどのように発想・デザインしたか  
建築家大高正人のもとでの挑戦を振り返り、今を語る

語り人：藤本昌也 (現代計画研究所)

主催：時代を語り建築を語る会実行委員会

共催：(公社) 日本都市計画学会中国四国支部

後援：(一社) 日本建築学会中国支部

(公社) 広島県建築士会

参加者：51 名

### ■ 大高正人の挑戦と葛藤

基町再開発事業計画の策定に当って、敷地面積 8.1ha に住宅戸数 3000 戸という大変な計画条件を市から提示された。



河川敷の不法占拠を退去させるのではなく、市は救済住宅として必要性も含めて 3000 戸を設定したのである。高層化への挑戦は必須であり、国からの後押しもあった。

外観形状の「く」の字型は、最初から考えたもので、大高さんの挑戦であり、前川事務所時代からの思いがあった。大高さんの中には、近代建築家は社会思想家として近代化に懐疑的で簡単ではないという大高と、表現者としての建築家は自由にやりたいという 2 面性があり、その葛藤がすごいエネルギーにつながった。

「大高さんの呟き」には、善意の内容を理解しない住民の要望やぎりぎりの予算など厳しい条件への苦悩とそれに挑む姿勢がうかがえる。

大高さんは、近代モダニズムは必要だがこれは人を幸せにしない、楽観的な近代主義ではうまくいかないと考えていた。現実には常に変わるから建築家はいつも考えるものであり、デザインの思想だけ持ってくるのを戒めており、当時のメタボリズムに、大高さんは警鐘を鳴らした。

建築家には天空派と大地派がいて、大高さんは自然など地域をベースに考える大地派であった。建築の仕事は、クライアントだけでできるものではない。行政も経済も成長オンリーだが、それは限界だと若い人も気づいているのではない。これからは、ローカリズムとグローバリズムの争いになる。普遍的な近代主義との戦いである。これは地域の問題を解くことにつながり、地域に寄り添って建築家は自分たちの技術を磨くことになる。

大学の設計教育で大高流を教えているところは少ない。自分達の職能と結びつけて考えてほしい。

### ■ 基町の設計過程の 4 つのポイント

建築家は敷地主義であるが、まわりまで考えた丹下氏の都市軸にどう応答するかを重視した。

#### ① 住棟配置手法：中央ショッピング案に至るまで

この仕事を受けて、最初は中央を学校で屏風型を円形に

つなごうという案を出し、山田市長・議会へ説明した。学校が囲まれているのは駄目だとの施主の否定を大高さんの中のあらゆる引き出しが対応した。住民の説得においては、当時、行政のことも市民のことも理解していた中島さんという本物の地域リーダーの存在が大きかった。

ヨーロッパのまちのようにきれいなまちにしたいという山田市長のセンスもあった。近代建築家は自分がつくったのだというが、出来上がったものは自分の作品ではなく、地元のいろいろな人が関わり、社会的なプロセスが大切というのが大高さんの思想であった。

#### ② 施設配置手法

当初は、鉄骨鉄筋コンクリート造で考えていたが、機械屋のセンスも加わり、純鉄骨造に変更した。廊下、EV、階段、便所、倉庫、風呂などの施設配置においては、できるだけ鉄骨の工場溶接や PC を採用し、現在のコンストラクション・マネジメントと同様の監理を行い、工期短縮、予算削減を図った。

#### ③ 団地内の動線計画手法

2 階の廊下は歩行空間としてつながっており、玄関から学校や集会所まで、歩行者と車の動線が分離されている。

#### ④ 屋上空間の整備手法

平面だけでなく、北から南へと高さを 20 階から 8 階まで徐々に変えており、景観と特定街区に配慮し、広島城の近くは城の高さより低くなっている。屋上庭園の評価は高い。市からの反対はなく、職員は地元から言われ放題であったが、いっしょにまちづくりに取り組んでいた。

### ■ 基町の今後の歩み

平和記念公園から一体となった緑に包まれた美しい景観であり、中央公園も含めて広島慰霊の空間として、世界遺産への提言をしたい。

広島あの場所と時代背景でできた特殊解であり、広島基町は偶然にできたものである。

### ■ 会場からの質疑では

プロティ部が補助対象であったかとの質疑があり、補助対象ではないことから市は苦労したことの紹介があった。金融公庫からの借り入れだったのではないかとのお考えが示され、区分するための壁も必要だったことの紹介があった。

公団、公社と民間デベロッパーの現在の住宅を整備する仕組みについての質疑には、基町の事業は、県と市が事業主体で低所得者と中堅層をも対象とするこの規模の事業を一人の建築家に任せるところが一種の地区計画的なものだったと回答された。

市内の他の大規模公共建築の軸線を原爆ドームに向ける質問には、それを一端否定し、建築家には目の高さで見えるものを大事にする人、丹下さんのようにモニュメンタルなものを大事にする人がいることを回答された。

現存する楠(被爆樹)を大切にしているとする発言に対しては、先生もこれは絶対に残さないといけな設計の上での大事な宝物であると考えていたことが紹介された。

(文責：北本 拓也・長谷山 弘志)



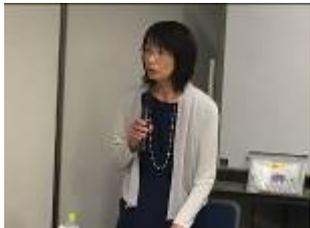
## ■討論会：広島都市形成の新視点討論会■

見学会に引き続き、歴史的建物保存問題、歴史的空間継承問題、都市形成問題を議論するため、討論会を行った。

(進行役は宮本茂(中国地方総合研究センター)、参加者数 28 人。)

### (1) 市民活動と被爆遺構・建物の保存・活用(広島平和記念公園被爆遺構の保存を促進する会 世話人 熊谷由利子氏)

広島平和記念資料館本館の耐震化工事に先立ち、地下に残る旧材木町の遺構等を調査し記録することを目的に、発掘調査が実施された。地下から風呂場のたき口、被爆したビール瓶、ビー玉などの被爆遺物などが発見されるなど、一瞬にして失われた 360 年の歴史を持つ町の日常生活が追体験できるものとなっている。現在 2020 年の被爆遺構整備に向けた作業、検討が進められている。なお、現在、遺構の一部は広島平和記念資料館東館 1 階に保存展示されている。



見学者にかつてのリアルな生活を見てもらふ場所を特定すること、公園の見学コース全体の中でルート設定を行うこと、その上でどのように発掘・保存・展示するか、また、地中であるため湿度が高く、苔や水滴・くもりなどの発生の可能性が高く、技術的な遺構の保存・展示方法の問題が指摘された。

施設例として、阪神淡路大震災による野島断層を保存した、北淡震災記念館(兵庫県淡路市)が示された。

### (2) 被爆建物と証言～人びとの体験・記憶を通じた(建造物)の意義・役割～(国立広島原爆死没者追悼平和祈念館館長 叶真幹氏)

被爆建物は、「(今我々に最も欠けている)悲惨への想像力」をかきたてるものである。

現在、追悼平和祈念館データベースには体験記収集数が 13.5 万件ほどあり、遺影、体験記、証言ビデオ等が収集、保存されている。本日見学施設の中では、広島陸軍被服支廠では、遺影 61 件、体験記 644 件、証言ビデオ 2 件と最も多くなっている。被爆後、臨時救護所となり、多くの市民が逃げてきたことも大きい。



被爆建物の意義は、①被爆を追体験する手掛かりになること、②様々な情報を収集して、実際に起こったことをリアルに感じられること、③私たちに欠けている悲惨への想像力を補うこと、にある。そのために、被爆建物を保存継承していくことは、人任せにせず市民一人ひとりが主体的に取り組むこと、また、市民が感じたこと、思ったことを発信し伝えていくこと、さらには、熱意と同時に具体的な発信力をもつべきことが提案された。

### (3) 歴史・意匠及び設計教育からみた被爆建物(広島大学岡河 貢氏)

被爆建物を活用した平和教育の必要性が提案された。被爆建物は市民の遺産でもあり、「世界遺産」であり、世界の次世代を担う若者に宿泊や交流するなどして体験してほしい。



広島陸軍被服支廠は、改修案を広島大学の設計課題で検討したり、展示施設での活用を考えたりしたことがある。最近の耐震技術ではもう少し安価で改修が可能である。これまで様々な提案はあるのだから保存活用に知恵がほしい。また、いわゆる廃墟としての保存となったとしても、保存・継承することが重要である。

改修のアイデアとして、広島大学旧理学部 1 号館の E 字形の中庭部分を覆い、新たなシンボルとしての第二の「原爆ドーム」とする案が提案された。

さらに、広島市の中に平和のデザインを組み込むことが重要である。実際に、広島駅新幹線口のペDESTリアンデッキの屋根は、折鶴をモチーフとして、折り紙のような幕を使い整備されたものである。こうした被爆建物や空間の持つ意味が、ますます重要となっている。

### (4) 被爆建物・遺構と都市形成の課題及び提案(広島諸事・地域再生研究所 石丸 紀興氏)

保存・継承で克服すべき問題は、多額な改修費、改修技術とりわけ構造技術、それを取り巻くシステム(制度・法あるいは仕組み)などが指摘できる。



今後の新たな保存・継承の新たな視点として、①負の遺産をより意味のある形で保存・再生している場合をより明確な形で基準化すること、②曖昧な基準で混乱をきたしているバッファゾーン内の規制に対して、基準のランク分けするか質的な類型を持ち込むこと、③広島市内に所在する UNITAR の研修実施の蓄積を活かして提言することが示された。

一連の被爆建物の保存再生の方向について、被爆 100 周年をどう迎えるか本気で模索・備えるべきであること、要求型でなく発信型の事業・ソフトで対応すること、今までの全国・世界からの支援に対してどう応えるかが問われていること、その上で、各種活動の空間的拠りどころをどうするか、長崎との連携特別法の新たなとらえ方・活用をどうするかといった問題提起が行われた。

### (5) 会場との意見交換、まとめ

広島市以外の参加者数人との意見交換を行った。継続的な意識啓発の取組の必要性を確認して散会した。



(文責:宮本 茂)

## ■ 時代を語り建築を語る会 (第 18 回) ■■■■

広島でのリニューアル体験から感じること

カオル建設 (株) 衣川知孝

日時：平成 29 年 9 月 27 日 18:30～

於：まちづくり交流プラザ

衣川氏は、41 年建設業にかかわり、リニューアルやリフォームに関わってきた。ちなみに、リフォームは少しだけ良くする、リニューアルは革新的に変えること。

昔、やっとお金を貯め、家をお母さんに建築したところ、「大学の建築科まで



進んだのに寒い家にしか住まわせてくれないのか」と言われたことにショックを受け、そこから、特に断熱に力を入れている。高断熱化することにより、スマートウェルネスといい、エネルギー効率がよくなり、安全で安心で健康に暮らせる住宅にすることにより、脳梗塞や心筋梗塞などになりにくい環境にできる。ちなみに、家が原因で脳梗塞や心筋梗塞になる率は中国地方がかなり上位にある。逆に寒い北海道では、エネルギー効率化のために技術の推進が進んでいるため、家が死因となっている率は低い。

この世界では、室蘭工科大学の鎌田紀彦氏が有名で、北海道広域 TLO で北海道の中でも知識の集積が進められているとのことで、先進地となっている。

気密化を進めないと、換気や湿度の調整がでないのので、まずは断熱材等で気流をとめ、気密化をしるところからは始める必要がある。あとは、エアコンが最近では高性能なものがあるので調整することができる。

エアコンは、お掃除ロボットは時間が経つにつれ粘土のようなものがこびりつくなど、後の掃除が難しくなることが多いのでお勧めできない。また、採熱除湿が国から推薦されていないため、販売されないようになったが、採熱除湿が一番効率がよい。

広島のような湿度の高いところであれば、乾燥機を使うという方法も良い。

断熱は、外断熱がはやっていた時期があったが、イギリスで起こった火事のように、外断熱が引火・誘引して大きな火事になる可能性もあるので燃えると怖いところがある。

また、衣川氏においては、耐震も進めている。昭和 56 年以前の建築物では、現在の建築物の耐力を 1 とすると、1/3 程度しかないことが多いため、耐震工事を行って 2×4 は古くても耐力があることが多い。耐震診断は補助金が広島市などから出るが、活用されていない状態のようだ。

また、古民家を残すということもあるが、だいたい広島など湿気の多いところでは、柱が腐っていたりするため、柱を接木するなどすると、どうしても費用が高くつく傾向にあるようだ。

耐震のみであれば木造 2 階であれば、200 万円程度あればできるが、様々な改修をすると、リニューアルは、一般的には新築よりも 400 万円安い程度だ。今までで最高価格は、5000 万円のリニューアルがある。それは、建替えのできない地区において、やむをえなかった場合だが、そのようなリニューアルの需要もある。

### ■ 会場からの質疑応答

寄棟の場合の断熱方法はどうすればよいか。

→寄棟の場合は、高い位置での換気等ができないため、軒下に換気扇等で圧力をかけて天井裏を換気する必要がある。結構な音がするかもしれない。

伝統的建築物のリフォームはどのようにすればよいか。

→伝統的建築物については、やはり気流を止めるのは難しいので、生活圏だけでも囲って気流を止めて空調を行うのが望ましいのではないかと。

(文責：福馬晶子)



## ■ H29 年度 支部地域活動助成事業報告 ■ ■ ■ ■

### ■ 四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会

日時：平成 29 年 9 月 25 日(金) 13:30~17:20

場所：丸亀市役所 2 階・第三会議室

プログラム：

第 1 部：情報交換会 (13:40~15:20)

第 2 部：見学会 (15:20~17:20)

懇親会 (17:30~19:30)

参加者：42 名



四国地方整備局建政部の協力を頂き、2017 年度地域活動助成事業として、今年も「四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会」を開催した。「リノベーションまちづくり」をテーマとした今回は、丸亀市の梶正治市長の挨拶から始まり、第 1 部の情報交換会において 3 件の話題提供が行われた。第 2 部の見学会では、実際に空き店舗をリノベーションして運営している物件やリノベーションが進行中の物件、今後予定されている物件等を見て歩いた。

<情報交換会> 13:40~15:20

#### (1) 「丸亀市のリノベーションまちづくり」

(丸亀市 都市整備部 都市計画課 立石 英登 氏)



立石氏から丸亀市の中心市街地の現状について、人口減少や少子高齢化、産業の衰退、空き家・空き地の増加、コミュニティの希薄化等、地域課題が山積している現状について説明がなされた。これらの山積した課題を解消する方策として、丸亀市は「リノベーションまちづくり」に重点を置き、市の計画と関連付けながら取り組んでいる。リノベーションまちづくりとは、空き家・空き店舗等の遊休不動

産をリノベーションの手法を用いて、新しい使い方を見出すことで、人口増加やコミュニティの再生等に繋げるまちづくりの手法の一つである。立石氏から、空き家・空き地を単体でなく、エリアで考えることにより、「エリアの価値」を高めて人を集めること、また、これまでの都市計画のように行政主導でなく、民間主導でプロジェクトを興し、行政がこれを支援する形の「公民連携」を目指していると説明。そこで、平成 27 年からシンポジウムやまち歩きを開始し、昨年は市内の遊休不動産を題材とした 2 泊 3 日のリノベーションスクールを開催。地域課題への意識を高め、物件再生の事業計画を作成し、店舗のオーナーに提案がなされた物件、進行中の物件等について紹介が行われた。最後に、各種の取組に対して、延べ約 600 人に関わってもらえたことや丸亀市の取組を市外にも広く発信できた一方、不動産オーナーや事業者等の地元キーパーソンが不在な点や単なる遊休不動産の解消に留まらず、様々な地域課題の解決にも繋がりたいという今後の課題も指摘された。参加者からは、公民連携における行政側の具体的なサポート内容やどこまでを取りまとめているのか、また、行政内部（職員）へのリノベーションに関する意識づくりの方法等について、活発な質問がされた。

#### (2) 「リノベーションまちづくりと建築設計者の役割」

(福屋 代表・建築家 堀川千恵子氏)



堀川氏は、大学院在学時に「リノベーション」をテーマとした研究に取り組んでおり、実際に視察しヒアリング調査を行った 4 県 5 市の先行事例について紹介がなされた。先行事例として、成功の兆しのある和歌山県和歌山市、リノベーション発祥の地である福岡県北九州市、県第 2・第 3 のまち宮崎県都城市、鹿児島県鹿屋市、和歌山県田辺市を取上げ、各地域の現状やリノベーションに関する取組、キーパーソンとなる人等について報告。そのうえで、各 5 市はリノベーションまちづくりの位置づけに、ある特徴があることを指摘。公共事業と合わせて相乗効果をねらったものやリノベーションまちづくりの枠をはずし、まちのファンづくりに力を入れたもの、面白いコンテンツをもった事業者と認識してもらうため、プロモーションを工夫する等、各地域を視察し、独自の視点で発見した特徴についても言及された。また、どの地域でも共通していた点は、リ

ノベーションまちづくりの建設設計者は、ハード面だけでなく人との繋がり・関わりも重視したソフト面にも力を入れて活躍している。「ハード面だけでなく、ソフト面でも活躍」することは、今後の建設設計者に求められる大きな役割であると強調された。参加者からは、各事例先が行ったリノベーションスクールの具体的な内容や実施主体はどこが担っているのか、また、費用面での課題については、リノベーションするのか新築にするのか、その見極め方法等、具体的な質問がされた。

### (3) 「リノベーションまちづくりに向けた政策ツール」

(四国地方整備局建政部 都市・住宅整備課長 塚本 文 氏)



塚本氏から、各地で行われているリノベーションまちづくりの事例やその効果・構成要素、検討中の新施策等について報告がなされた。事例は、島根県江津市、愛媛県松山市、宮崎県日南市、大阪市天王寺公園を挙げ、例えば、大阪市の天王寺公園では、盛り土を設け、大阪城を背景にフリースタイル・モトクロスイベントを開催し、今までにない世代を集客している。公園という「子どもの遊び場」というイメージが強いが、少し視点を変えて使い道考えると異世代を呼び込むきっかけとなる。リノベーションは、新たな活動の兆しや活気、また、「自分もやってみたい」というプラスの連鎖反応が起こり、まちへの波及効果が期待できることも指摘された。さらにリノベーションまちづくりに向けた政策ツールとして、「個別の空間単位(空家・空き地の活用)」や「街並・地区単位」、「まちづくり・都市計画」、「活動の支援(リノベーションスクール、セミナーの開催)」等で活用できる制度について紹介。どの制度も補助金を受けられる前提条件が異なるため、申請前に該当する内容か確認が必要であるとのこと。最後に、空き家・空き地が時間的・空間的にランダムに発生する「都市のスポンジ化」の課題を取り上げ、これに対応するため、都市計画基本問題小委員会で検討中の新施策の内容について説明がなされた。この新施策の主な概要としては、小規模な土地の入れ替えを可能とする「空間再編賑わい創出事業(仮称)」を創設し、空き地の集約化と有効活用を促進するものである。検討段階のため変更の可能性はあるが、リノベーションに携わる仕事をしている参加者からは、「ぜひ、前向きに進めていただきたい」等の肯定的な意見が聞かれた。

### <まちづくり見学会>15:20~17:20

見学先: 旧重元果物店、城下町リノべる、JUNJU、  
寶月堂、丸亀ブルワリー、など



見学会では、実際に空き店舗をリノベーションして運営している物件(旧重元果物店、寶月堂、JUNJU)やリノベーションが進行中の物件(城下町リノべる、丸亀ブルワリー)などを見て歩き、ところどころ市の職員の方々から説明をいただいた。実際に運営されている「JUNJU」は、丸亀通町商店街に位置するパン屋で、朝早くから営業しイートインスペースも設けられている。そのため、通学途中の学生や保育所に子どもを送迎する母親等から人気を集めており、ちょっとした商店街の憩いの場になっている。リノベーションが進行中の物件「城下町リノべる」は、デイサービスの隣に位置し、未完成の部分は建築士会の有志によって作業が進められている。一部のスペースで、認知症カフェやワークショップ、デイサービスの利用者の方が作業する等、目的に応じて様々な人に活用されている。丸亀市は、地域再生のためにリノベーションまちづくりに取り組んで間もないが、市民や市外の人、建築関係者、団体等、様々な人を巻き込んで一歩ずつ進んでいることがうかがえる。まちづくりには様々な手法があるが、その一つである「リノベーション」の魅力を知り、その効果を感じることができるようになった。



(文責: 木下由梨枝・高塚 創)

